

終助詞「ね」の上昇音調について

—内省に基づく考察—

轟 木 靖 子

要旨

終助詞「ね」の取る上昇音調は疑問上昇とアクセント上昇の2種類がある。この2種類の上昇音調は、異なる意味・機能に対応して音韻的に区別される場合と、どちらか一方の音調の音声的変異でしかない場合がある。この2種類の上昇音調の区別がどのような文であられるのかについて、内省に基づき、文の種類および述語形式の観点から整理し、分析・考察した。「ね」の疑問上昇とアクセント上昇は、(1)両方の音調を取り、音韻的に区別される場合、(2)どちらか一方しか取らない場合がある。疑問上昇を取る場合は、(1)のケースが見られ、(2)の場合でもアクセント上昇が音声的変異として用いられることもある。アクセント上昇の場合は(2)で、疑問上昇が使われると不自然になることが多い傾向があるといえる。

1 はじめに

日本語において、文末の表現形式やそれともなう音調は、話し手の心的態度を示すという点で大きな役割を果たしている。文末で使用される形式は様々であるが、この中で、終助詞は話し言葉でのみ使用されるという点と、文末音調一般に見られる音調と意味・機能の対応がかならずしも見られないという点において、単なる述語形式で終わる文とは異なるという認識を持つ必要がある。終助詞を伴わない文では上昇調＝問いかけ・疑問といった対応がみられるが、同じ音調で「よ」を発話しても聞き手への問いかけにはならないというように、終助詞の形態的意味により、一般的に想定できる音調とは異なる意味・機能が対応する場合がある。

文末音調の種類およびその役割については、川上(1963)、吉沢(1960)や郡(2003)での考察が詳しい。川上(1963)では、第一種から第四種、および第五種を認めている。この中の第一種と第三種は吉沢(1960)では昇調1、郡(2003)では疑問型上昇と呼ばれる。文末で用いられることにより、疑問や質問、問い返しをあらわす。上村(1989)では川上(1963)の第一種をのほり音調、第三種をくだりのほり音調と呼んでいるようである。本稿では疑問上昇と呼ぶ(注1)。

川上(1963)の第四種、吉沢(1960)の昇調2は郡(2003)では強調型上昇と呼ばれる。文末で用いられることにより、その語(句)を強調し強く訴えかけるものである。本稿ではアクセント上昇と呼ぶ。

終助詞「ね」はこの疑問上昇とアクセント上昇の2種類の上昇音調を取り、筆者はこれまでこの2種類の音調が音韻的に区別され、それぞれ異なる意味・機能に対応するという立場を取ってきた(轟木(2008))。現在もこの認識ではあるが、詳細に分析すると、「ね」の2種類の音調が区別される場合と区別されない場合が観察される。

本研究では、終助詞「ね」の2種類の上昇音調について、音韻的区別がある場合とない場合を内省に基づき整理し、各上昇音調が用いられる述語の特徴について考察する。なお、筆者は言語形成期に当たる時期を東京都で過ごしている。

2 終助詞の音調について

終助詞の音調は、前接の語の最終拍に対する接続の仕方と終助詞の拍内音調の組み合わせによって記述することができる。

前接の語の最終拍に対する接続の仕方を区別するのは、例えば同じ上昇音調であっても、「行くね」(念押し)と「行くの」(質問)を比べたとき、「ね」は前接の高い拍「く」にそのままの高さでついて上昇するのに対し、「の」は前接の高い拍「く」に対して低く接続する、というような違いがあるからである。前者を順接、後者を低接と呼ぶが、このもとになっているのは、和田(1969)の助辞接辞のアクセントの概念である。以下、高い拍から低い拍への下降を「」、アクセント核による下降を'、低い拍から高い拍への上昇を「」で示すと、前接の語が無核(平板型)の場合は、サ「クラヨ(順接)とサ「クラ」ヨ(低接)のように、音声的に違いが明確になるが、有核(頭高型、中高型、尾高型)の場合は、アクセント型に従って接続しても低い拍になるので、音声的には順接と低接の区別は明確ではなくなる(カ'ラスヨ、タ'マ'ゴヨ、ヒ「カリ」ヨ)。

したがって、たとえば「雨だよ」をア'メダヨと発話した場合の「よ」は、順接か低接か区別がつかず、これを確かめるためには、同じ機能を持つ「よ」が「風だよ」という発話でカ「ゼダ」ヨとなるかカ「ゼダ」ヨとなるかを見なければならぬ。

拍内音調については、聴覚的に上昇も下降もしない平坦、上昇、下降、上昇下降の4種類があるが、上昇については、前項でみた、疑問上昇とアクセント上昇の2種類を考える。

以上から、順接および低接のそれぞれについて、平坦、疑問上昇、アクセント上昇、下降、上昇下降の5種類を想定することにより、理論上は10種類の音調が可能となる。しかし、すべての終助詞がこの10種類を取るわけではない。なかでも、低接・下降は、低接・平坦のバリエーションと考えるほうが自然である。10種類の音調から低接・平坦を除いた9種類について、「やるね」を例に図1から図3に示す。

3 終助詞「ね」の音調について

3.1 これまでの分析

轟木・山下(2008)では、日本語母語話者への聞き取り調査の結果をもとに、日本語教育で指導すべき終助詞の意味と音調の対応について整理した。この中で、「ね」については、いずれも聞き手の存在有りとしたうえで、

聞き手からの回答を求める	……疑問上昇
聞き手への伝達	……平坦(疑問上昇)
話し手の感情表出	……下降(平坦、アクセント上昇、上昇下降)

とした。音調が複数あるものについては、聞き取り調査で選択した回答者が最も多いものを先にあげ、その次に多く選ばれているものを()内に示している(注2)。

この時実施した聞き取り調査では、「ね」は「私が今からやるね」(伝達)という設定でおこなったところ、順接・平坦が9割前後の回答者に選ばれていた。しかし、後述するが、「動詞終止形+ね」の発話形式は、「ね」をともなった言い方の中で典型的なものとは考えにくいいため、このときの結

終助詞「ね」の上昇音調について

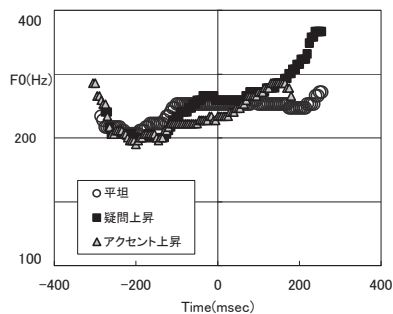


図1 順接・平坦、順接・疑問上昇、順接・アクセント上昇

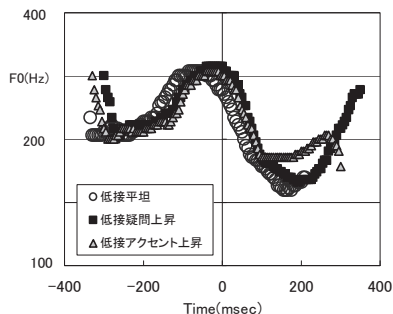


図2 低接・平坦、低接・疑問上昇、低接・アクセント上昇

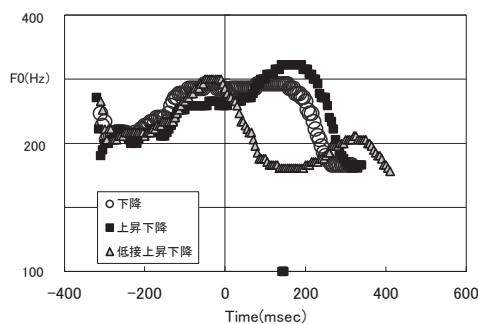


図3 順接・下降、順接・上昇下降、低接・上昇下降

図1～図3 「やるね」音調図

各図の先頭部分を0 msecに合わせ、重ねて表示。録音にはTEAC DA-PI (DATレコーダ)、Shure MX184 (マイク)、DATテープを使用し、音声分析ソフト「音声録聞見」(デitel、現C&Dテクノロジーズ)を使用してCSV形式で保存したものを100Hzをベースに対数表示している。

論として出した「ね」の順接・平坦を重要な音調として認める考え方は改める必要があると現在では考えている。

3.2 「ね」の疑問上昇とアクセント上昇の使い分けについて

3.2.1 確認要求と同意要求

大曾(1986)では、「ね」には確認を求める「ね」と相手の同意を求める「ね」があり、この二つの「ね」には明らかにイントネーションの違いがあることを指摘し、「確認を求める「ね」には上昇調の疑問文のイントネーションが使われるが、同意の「ね」の方には疑問文のイントネーションは使われない」としている(p.91)。そこでは以下の2文が例としてあげられている((a)(b)の記号は筆者による)。

(a)「今日は金曜日ですね。」「ええ、そうです。」

(b)「今日は金曜日ですね。」「そうですね。やっと一週間終わりましたね。」

ここで、(a)は聞き手に確認し、回答を求める発話で、「ね」は疑問上昇である。(b)も、聞き手への確認ではあるが、「今日が金曜日であること」の確認というよりは「私が今日が金曜日だと判断していること」を聞き手もわかっていることを前提に、それに対する同意を引き出すことで確認しようとする発話であると考えられる。このような場合の「ね」はアクセント上昇となり、聞き手が同意する場合、応答には「ね」が使われ、アクセント上昇あるいは上昇下降が用いられることが多いようである。

大曾 (1986) で『今日はいい天気ですね。』の『ね』が同意を求める『ね』だとすれば、その答の『そうですね。』の『ね』は同意を示すほうの『ね』である」(p.91)と述べられているように、アクセント上昇の「ね」には同意要求と同意表明の二つの意味・機能があり、同意要求か同意表明かは談話のコンテクストによって変わると考えられる。

轟木・山下 (2015) では、「薬、ちゃんと飲んだね」の「ね」が疑問上昇であれば「飲んだかどうかを確認する」発話であり、アクセント上昇であれば「(いつもは嫌がるのに今日は)ちゃんと飲めたことを褒める」発話であると述べたが、前者に対する答えは「うん、飲んだよ」「いや、まだだよ」、後者に対する答えは、飲んだ本人が答える場合であれば「うん、えらいでしょ」第三者が答える場合は「そうだね。えらいね。」のようにアクセント上昇を伴う同意表明の「ね」が用いられると考えられる。

以上の例は同じ文で「ね」の音調が疑問上昇とアクセント上昇の2種類が想定され、意味のうえでも両者に区別があり、それによって応答の文も異なる場合である。しかし、「ね」の使われる文を詳細に観察すると、疑問上昇しか取らない(取りにくい)場合やアクセント上昇しか取らない(取りにくい)場合が存在するようである。これは、文の意味上の制約によるものと考えられるが、終助詞「ね」の二つの上昇音調それぞれの使用範囲を種類や形式的側面から説明することができれば、より正確に終助詞「ね」の用法について、実態を明らかにすることが可能となる。

そこで、本稿では以下に「ね」が、疑問上昇とアクセント上昇の2種類を取ると考えられる場合、アクセント上昇しか取らないと考えられる場合、疑問上昇しか取らないと考えられる場合に分けて、述語形式の観点から内省に基づき分析し、そのうえで「ね」の2種類の上昇音調の対応する意味・機能について考察をおこなう。

3.2.2 疑問上昇とアクセント上昇の2種類を取る場合

「ね」が疑問上昇とアクセント上昇の2種類の音調を取る場合、二つの音調がそれぞれ異なる意味・機能に対応している場合と、実質的にはどちらか片方の音調の変異でしかない場合がある。後者については次節以降で考察し、本節では2種類の音調が異なる意味・機能に対応していると考えられる場合を取り上げる。

以下の(1)から(4)は疑問上昇とアクセント上昇の2種類を取り、かつ意味・機能の上でも違いが認められる。

(1) 薬、ちゃんと飲んだね

疑問上昇：聞き手あるいは第三者が忘れずに薬を飲んだか確認する

応答は「うん、飲んだよ」「いや、飲んでないよ」

アクセント上昇：聞き手あるいは第三者が、いつもと違って嫌がらずに薬を飲んだことをほめている、あるいはそのことに同意を求める。

応答は「うん、すごいでしょ」(飲んだ本人が答える場合)

「そうだね。いつもこうだったら楽なのにね」(第三者が答える場合)

(2) 田中さん、来ているね

疑問上昇：田中さんが来ていることについて確認する

応答は「うん、来ているよ」「いや、来ていないよ」

アクセント上昇：田中さんが(来ないと思ったけど)、来ているという自分の認識を聞き手も共有していることを前提に、同意を求める。

応答は「うん、そうだね」「本当にね」等。

(3) 運動会(は)中止だね

疑問上昇：運動会が中止になったことについて確認する。

応答は「うん、そうだよ」「いや、まだわからないよ」等。

アクセント上昇：運動会が中止になったという自分の得た情報を聞き手も共有していることを前提に同意を求める

応答は「そうだね。残念だね」「え？ そうなの？」

(4) 明日(は)試験だね

疑問上昇：明日試験があることについて確認する。

応答は、「うん、そうだよ」「え、ちがうよ」等。

アクセント上昇：明日試験があるという自分の認識を聞き手も共有していることを前提に同意を求める。

応答は「(うん、) そうだね」「え？ そんなの知らないよ。」等。

動詞述語の場合、終止形に「ね」がつくと、話し手＝動作主の行為を伝えたり(「今から行くね」)、聞き手の行為を念押ししたり(「ちゃんと行くね」)、眼前の事態に対する驚きや皮肉の感情を聞き手にも共有しようと持ちかける(「よく寝るね」)等、いずれも次節で見るアクセント上昇しか使われにくい発話となる。

疑問上昇をともなると確認要求がされるのは、すでにおこった事態について確認を求めることが多いため、動詞述語の場合は(1)(2)のようにタやテイルを伴って、すでに起こったことと結果について述べる文に用いられやすいと考えられる。同じテイル形であっても

(5) (花を見て)きれいに咲いているね

の場合は眼前の状況を聞き手と共有していることが明らかなため、それをあえて疑問上昇で確認することは考えにくく、アクセント上昇による同意要求の発話になると考えられる。

動詞終止形を使い、行くかどうか不安な相手に対して「ちゃんと行くね」と疑問上昇で確認をする発話も可能だが、この場合は「ちゃんと行くよね」のように「よね」を伴った発話となるほうが自然なようである(轟木(2013))。

形容詞述語の場合、「今日は寒いね」「この問題難しいね」のように終止形の場合は眼前の事象の属性や性質、状況を聞き手と共有していることを前提に同意を求める発話となりやすい。目の前にないことであれば、「明日は寒いね(疑問上昇)」のような確認要求の発話はないとはいえないが、明日は寒いという、ある意味不確かな状況認識を聞き手も共有するということは考えにくく、また、形容詞の性質上、事物や事象の属性や性質をとらえるという点で話し手の主観が色濃く反映された文となるため、「聞き手も自分と同じようにとらえているか」を確認するということが自体が成立しにくいとも考えられる。過去・完了のタをともなった

(6) 昨日は寒かったね

(7) あの問題意外と易しかったね

のような場合にも疑問上昇が使われにくいのは、「昨日は寒かった」「あの問題が易しかった」という文が客観的事実の述べ立てというより話し手が主観的に事態をとらえた結果として成立してい

る文であるため、「昨日は寒かった」「あの問題が意外と易しかった」という話し手の認識を聞き手も持っていることを前提とした同意要求の発話になりやすいと考えられる。

名詞述語の場合、(3)のように現在も含めた事態について述べる場合、(4)のようにまだ起こっていない事態について述べる場合があるが、いずれの場合も疑問上昇＝確認要求、アクセント上昇＝同意要求が認められる。(3)(4)の「だ」を「だった」にすると

(3') 運動会は中止だったね

(4') 明日試験だったね

となるが、(3')はアクセント上昇＝同意要求としての発話のほうが自然であると考えられる。(4')のタは過去や完了ではなく「忘れていた過去の認識を思い出す」(寺村(1984, p.338))用法であるが、疑問上昇による確認要求、アクセント上昇による同意要求どちらも成り立つと考えられる。同じ名詞述語であっても

(8) 今日は雨だね

のように眼前の事象について述べたものは形容詞文の場合と同様、同意要求の発話しか考えにくい。さらに、

(9) 昨日は雨だったね

の場合、疑問上昇による確認要求の発話とならないことはない(一日遅れで日記を書いているときに前の日の天気を確認するような場合)が、ごく自然な解釈として出てくるのはアクセント上昇による同意要求の発話である。

以上のことから、「ね」の疑問上昇とアクセント上昇の使い分けが多くみられるのは動詞述語でタまたはテイルの形が使われている場合ですでに起こったことや結果について述べる内容、名詞述語の場合は、これから起こることのように、話し手と聞き手が発話時に目の前で情報を共有できない内容であれば2種類の音調の使い分けが生じることがあるといえる。

3.2.3 アクセント上昇を取る場合

終助詞「ね」がアクセント上昇しか取らない場合は、述語の意味内容から疑問上昇による確認要求が相容れず、アクセント上昇による同意要求しかそぐわない場合である。

前節でみたように、動詞述語の場合はテイル形式で眼前の状況をあらわす文のときは「ね」はアクセント上昇となり、同意要求の発話となりやすい。動詞のテイル形については、金田一分類の継続動詞と瞬間動詞の分類があるが、テイル形が継続か結果のどちらをあらわすかに関わらず、目の前で起こっていることを描写する文の発話であれば、「ね」はアクセント上昇で、同意要求の発話となりやすい。この場合、「ね」が疑問上昇で発話されることが想定できない場合と、疑問上昇でも発話可能だが、意味・機能のうえではアクセント上昇と変わらず、アクセント上昇の音声的変異としてあらわれる場合があるようである。

(10) 今から行くね

アクセント上昇:あらかじめ約束していた相手に、電話をして今から自分が行くことを伝える。

疑問上昇ではやさしい言い方に聞こえる。
応答は「うん、わかった」「え、あ、そう」等。

(11) ちゃんと行くね

アクセント上昇：行くのを嫌がっている相手に念押しする。疑問上昇でも少しニュアンスは変わるがほぼ同じ用法として成立しそうである。
応答は「はい。」「んー。」等。

(12) よく食べるね

アクセント上昇：御飯を山盛りにして食べている家族や仲間を見て、その本人あるいはいっしょに食事をしている本人以外の人家族に対して、話し手が驚いている、あきれているという気持ちを表明しつつ同意を求める。
疑問上昇では不自然。
応答は本人なら「え、このくらい普通だよ」本人以外なら「そうだね。すごい量だね」等。

(13) セミが鳴いているね

アクセント上昇：セミが鳴いているのを聞いて、いっしょにいる相手も同じように聞いているということを前提に同意を求める。疑問上昇では、同じ場にながらその状況について確認している発話となるため、この状況では不自然。様々な虫が鳴いている中で「他の虫の音に紛れてわかりにくいけどセミが鳴いている」ことを聞き分けて確認するような特殊な状況での発話であれば成立する。
応答は「(うん、) そうだね。もう夏だからね。」「え？ そう？」等。

(14) 上手に描けたね

アクセント上昇：子どもが描いた絵を見て、「絵が上手に描けていると認識している」ことを伝えることにより、褒める。疑問上昇では不自然。
応答は「ありがとう」「そうでもないよ」等。

(15) これ、難しいね

アクセント上昇：勉強を教えている生徒の持って来た宿題の問題が難しく、なかなか答えを出せない状況で、その問題が難しいという認識を相手も持っているということを前提に同意を求める。疑問上昇では不自然。
応答は「うん、そうだね」「え、そうかな」等。

(16) そんな風に言ってくれるなんて、うれしいね

アクセント上昇：自分の作品を褒めてくれた相手に対して、あるいは別の人が褒めてくれたという話を伝えてくれた相手に対して、自分がうれしいと感じていることを、聞き手もおそらく予想しているだろうという前提で伝える。疑問上昇では不自然。
応答は、褒めた本人なら「そう？ 本当にうまいと思ったから」、伝えてきた別人なら「よかったね」等。

(17) きれいだね

アクセント上昇:花火大会で、夜空に上がった花火を見て、いっしょに見物している相手に「花火がきれいだ」という自分の認識を共有していることを前提に同意を求める。疑問上昇では不自然。

応答は「うん、そうだね」「うーん、そうでもないかな」等。

(18) 今日雨だね

アクセント上昇:朝から雨が降っていて、いっしょにいる家族に「今日は雨だ」という自分の認識を共有していることを前提に同意を求める。疑問上昇では不自然。

応答は、「うん、そうだね」「え、本当に？」等。

これらの中で、疑問上昇が音声的変異として現れる可能性があるのは、(10) (11) である。(10) (11) は、同意要求ではないこと、述べられている内容が話し手あるいは聞き手のこれから先に行う行為についてであることが共通点として考えられる。また、他の(12) から(18) は、述べられている内容が目の前にあることや発話の時点で進行中の事態であることが共通点として考えられる。さらに、その事象や事態に対する話し手の感情が述べられているため、話し手の感情表出が主となる発話として「ね」は上昇下降も可能である。

以上のことから、「ね」がアクセント上昇のみの場合は、眼前の事象や事態をとらえて話し手が何らかの感情を抱いていることを伝えたり、その認識を共有していることを前提に話し手に同意を求める発話であると考えられる。述語に形容詞が用いられているときが多いと考えられるが、タ形やテイル形も含めた動詞述語や名詞述語の場合でも、眼前の事象や事態について述べる内容であれば成立する。話し手が感情の表出を多く出す発話であれば上昇下降を取ることもある。動詞述語の場合、聞き手も分かっていることで、未実行の話し手や聞き手の動作について伝えたり念押しする発話のときは、「ね」は疑問上昇を取ることもあるが、意味・機能のうえではアクセント上昇と区別がないと考えてよい。またこの用法の場合感情表出を伴う同意要求ではないので「ね」は上昇下降を取ることもない。

3.2.4 疑問上昇を取る場合

終助詞「ね」が疑問上昇しか取らない場合は、文の意味内容から、疑問上昇による確認要求しか取れない時ということになるはずであるが、アクセント上昇による同意要求としても成立することが多く、疑問上昇による確認要求しか取れないものは見つけるのが難しい。

(19) 田中さん、本当に来るね

疑問上昇:後日予定されているパーティーに田中さんが来るということを確認する。アクセント上昇では不自然。ただし、この言い方よりも、「本当に来るんだね/来るのね」のように「の(だ)」を介するほうが多いように思われる。ただし「来るんだね」はアクセント上昇でも発話可能で、その場合は「田中さんが来る」ということを知ってあまり良い気分でない話し手が、聞き手に同意を求めるような発話となる。

応答は、「うん、そうらしいよ」「んー、よく知らない」等。

(20) ちゃんとスイッチ切ったね

疑問上昇:部屋を出るときにエアコンや電気のスイッチを切ったかどうか聞き手に確認する。

アクセント上昇が使われることもあるが、その場合でも意味の上では、話し手がほぼ回答を

決めつけているニュアンスにはなるものの確認要求となる。

応答は「うん、切ったよ」「え、切ってないよ」等。

(21) 田中さんですね。

疑問上昇：本人に直接、田中さん本人であることを確認する。アクセント上昇の場合、話し手がほぼ回答を決めつけているようなニュアンスとはなるが、確認要求となる。

述語部分が形容詞で、発話内容が話し手と聞き手が共有している事態について述べている場合は、疑問上昇の「ね」による確認要求の発話は成立しにくい。タ形にした場合でも

(22) (映画を見て)面白かったね。

という場合も、通常はアクセント上昇による同意要求である。聞き手も面白いと感じていたことについての確認要求であれば、「面白かったでしょ」「面白かったよね」のような言い方になると思われる。

3.3 考察

ここまでの分析をもとに、前章までで見た文例について、(1) ①疑問上昇か②アクセント上昇か、確認あるいは認識・同意の内容が(2) ①話し手自身のことか②聞き手自身のことか③第三者のことか、(3) ①発話時より以前のことか②発話時のことか③発話時より後のことか、(4) ①眼前で直接見聞きできることか②眼前で直接見聞きできないことか、という観点から分類をおこない、同じ音調を取るものが並ぶように整理し、表1に示す。

「ね」が疑問上昇を取ることが自然な文例は26例中9例で、その内訳は、アクセント上昇で別の意味・機能を持つものが4例(今日は雨だね、運動会は中止だね、田中さん来ているね、薬、ちゃんと飲んだね)、アクセント上昇でも同じ意味・機能を持つ者が2例(今から行くね、ちゃんと行くね)であり、疑問上昇しか取らないと考えられるものは3例である。この中で、「田中さん、本当に来るね」は「来る(んだ)よね」という言い方を用いることが多いことを踏まえると、聞き手本人に確認する「田中さんですね」と「ちゃんとスイッチ切ったね」の二つだけが疑問上昇の「ね」の代表的な用法ということになる。この2文に共通するのは確認の内容が聞き手自身のことである、という点であり、目の前に見えるかどうか、発話時より以前かどうかというようなことはあまり関係がなさそうである。また、この2文も含め、「ね」が疑問上昇を用いる文には述語に形容詞が使われている例が今回の観察では見当たらなかった。これは、形容詞が事物の属性や性質をとらえるものであること、「ね」が聞き手が話し手と同様の認識をしているという前提で用いられる終助詞であることによるものと考えられる。つまり、形容詞文に「ね」がつくと、対象の属性や性質という、ある意味普遍的なものについて話し手と聞き手が認識を共有していることになるため、改めてそのことについて確認することが不自然になるということである。動詞述語文や名詞述語文の場合、「ね」を伴う場合に話し手と聞き手が共通認識を持っていることが前提であることは変わりがなが、事態を時間軸上で捉える性質のもの(動詞)や、話し手の判断を伴うもの(名詞+だ)であるため、話し手の認識について改めて聞き手に確認することが可能となると考えられる。

いっぽうでアクセント上昇しか取らない文例は26例中17例で、比較的多いのは「目の前で見聞きできる事態について同意を求める」ものである。文例としては第三者についてもが多くを占めたが、「そんな風に言ってくれるなんて、うれしいね」「上手に描けたね」「薬、ちゃんと飲んだね(と

表1 各例文における「ね」の音調と述語の種類および内容

品詞	時刻・相	文	疑問上昇	ア上昇	話し手	聞き手	第三者	発話時前	発話時	発話時後	眼前あり	眼前なし
V		今から行くね	◎	◎	●					●		●
V		ちゃんと行くね	◎	◎		●				●		●
V		田中さん、本当に来るね	◎	んだよね			●			●		●
N		今日は雨だね(外を見ないで)	◎				●		●			●
N		<u>運動会(は)中止だね(中止かどうか確認)</u>	◎				●		●		●	
N		(本人に)田中さんですね	◎			●			●		●	
V	タ	ちゃんとスイッチ切ったね	◎			●						●
		田中さん、来ているね(来ているかどうか確認)	◎				●		●			●
		<u>薬、ちゃんと飲んだね(飲んだかどうか確認)</u>	◎			●						●
N	タ	運動会は中止だったね		◎			●					●
N	タ	明日試験だったね		◎			●			●		●
N	タ	昨日は雨だったね		◎			●					●
A		<u>運動会(は)中止だね(雨が降っているから)</u>	◎	◎			●		●		●	
A		そんな風に言ってくれるなんて、うれしいね	◎	◎	●				●		●	
A		これ、難しいね	◎	◎			●		●		●	
A-na		(花火を見て)きれいだね	◎	◎			●		●		●	
N		<u>今日は雨だね(雨が降っているのを見て)</u>	◎	◎			●		●		●	
V	タ	上手に描けたね	◎	◎		●			●		●	
V	テイル	きれいに映っているね	◎	◎			●		●		●	
V	テイル	セミが鳴いているね	◎	◎			●		●		●	
V		よく食べるね	◎	◎			●		●		●	
		田中さん、来ているね(来ないと思ったのに)	◎	◎			●		●		●	
A	タ	<u>薬、ちゃんと飲んだね(飲んだことをほめる)</u>	◎	◎		●			●		●	
A	タ	昨日は寒かったね	◎	◎			●		●			●
A	タ	あの問題意外と易しかったね	◎	◎			●		●			●
A	タ	(映画を見て)面白かったね	◎	◎			●		●			●

下線を付した例文は、疑問上昇とアクセント上昇の使い分けがあることを示す。
最もよく使われると思われる音調に◎を、その次に用いられることが多い音調には○をつけている。○しかないものは他の語形がより自然であると考えられる場合である。

褒める)」はそれほど特殊な例でないことから、同意要求の内容が話し手か聞き手か第三者かという点はあまり関係がないように思われる。この点で改めて疑問上昇が用いられる例文を見ると、本人に確認する「田中さんですね」以外はすべて目の前には見えないことについて確認している文である。また、アクセント上昇の「ね」を用いる文で、形容詞の過去形が述語となっている「昨日は寒かったね」「あの問題意外と易しかったね」「(映画を見て)面白かったね」等の発話時以前のことに ついて同意を求める文は、すでに感じた感覚が発話時にも残っていて、そのことについて同意を求めているとも考えられる。動詞タ形の「上手に描けたね」が完了相のタであることもこの裏付けとなりうる。

4 まとめ及び今後の課題

終助詞「ね」の疑問上昇とアクセント上昇について、音韻的区別の有無という観点から、二つの上昇音調が用いられる文の特徴を明らかにすることを試みた。疑問上昇しか使われにくい文例は種類が少なかったが、使われる機会が少ないということにはならず、また、今回内省で導き出した例文では眼前の事態についてアクセント上昇を用いて聞き手に同意を求めるものが多かった。形容詞述語については、今回の分析では疑問上昇を取りにくいという結論になった。

アクセント上昇の「ね」には話し手の聞き手に対する同意要求だけでなく、「今日はいい天気ですね」に対する応答の「そうですね」の「ね」のように、相手の発話に対する同意表明の機能がある。今回はここまで分析が至らず、また個人の内省のみに基づいた分析であったため、今後は東京で生育した話者に対する録音調査をおこない、より詳細に明らかにしていきたい。

注

- 1 「疑問上昇」「アクセント上昇」は郡(1990)の用語である。
- 2 論文中では表で示している。

参考文献

- 上村幸雄(1989)「日本語のイントネーション」『ことばの科学3』むぎ書房、193-220.
- 大曾美恵子(1986)「誤用分析1『今日はいい天気ですね。』『はい、そうです。』」『日本語学』5巻9号、91-94. 明治書院.
- 川上 泰(1963)「文末などの上昇調について」『国語研究』16号:25-46.
- 郡 史郎(1990)「大阪語の文末詞『か』の音調と機能:内省に基づく考察」『音声言語 IV』近畿音声言語研究会、1-25.
- 郡 史郎(2003)「イントネーション」『音声・音韻(朝倉日本語講座3)』朝倉書店、109-131.
- 寺村秀夫(1986)「タ」の意味と機能 —アスペクト・テンス・ムードの構文的な位置づけ—『日本語のシンタクスと意味II』、313-358. くろしお出版.
- 森木靖子(2008)「東京語の終助詞の音調と機能の対応について —内省による考察—」『音声言語VI』近畿音声言語研究会、5-28.
- 森木靖子(2013)「共通語における終助詞「よ」「ね」の音調について —発話資料の分析—」近畿音声言語研究会7月月例会、西宮市大学交流センター.
- 森木靖子・山下直子(2008)「終助詞の音調における地域差と共通点 —東京・大阪・岡山・香川を例として—」『日本語教育』136号、日本語教育学会、68-77.
- 森木靖子・山下直子(2015)「視聴覚効果を生かした教材の試案 —終助詞の音調を中心に—」日本語日本文化教育研究発表会、3月14日、大阪大学.

- 吉沢典男(1960) 「イントネーション」国立国語研究所『話し言葉の文型(1)』秀英出版、249-288.
和田 實(1969) 「辞のアクセント」『国語研究』29号、1-20.